2022年1月17日付　循環経済新聞

バイオガスで私募債発行に貢献

トーヨー養父バイオエネルギー

鶏ふん処理の取組が評価

トーヨー養父バイオエネルギー（兵庫県養父市、岡田吉充社長）は、運営する「トーヨーバイオメタンガス発電所」での取り組みが、顧客の私募債発行などにつながったと明らかにした。

顧客であるサンファーム（同市）が、但馬銀行の次世代創生型私募債（SDGs推進型）を発行し、手数料の一部を養父市に寄付した。同発電所では、サンファームの養鶏農場から出る鶏ふんの全量を受け入れ、メタン発酵の原料に活用している。

次世代創生型私募債は、地域の発展や人材育成などに積極的に取り組む企業が私募債を発行する際、但馬銀行が私募債発行手数料の一部を寄付金として拠出。発行企業が指定した自治体等に寄付・寄贈を行うもの。

2019年5月に本格稼働した同発電所では、国内最大級の出力1426キロワットで発電を行い、FITで関西電力に全量売電している。処理能力は日量最大70トン。主な原料として、同市内の畜産農家から家畜ふん尿、同県内の食品工場から食品残さを受け入れ、約35～38度Cの湿式中温メタン発酵でバイオガスを生成する。

強みは、通常メタン発酵に向かないとされる鶏ふんを原料にできる点だ。「鶏ふんは発酵に悪影響を与えるアンモニア阻害を引き起こしやすいが、希釈することで利用可能となった」という。

今回、私募債を発行したサンファームでは、年間270万羽を超えるブロイラー飼育を行っており、農場から排出される鶏ふんは年間4200トン以上に上る。

トーヨー養父バイオエネルギーは、「バイオガス発電の取り組みが取引先の私募債発行につながったことは、大変意義深く光栄だ」としている。

私募債の手数料寄付時のようす

トーヨーバイオメタンガス発電所の全景